

ロシア資料の音便

——マ行動詞の音便を中心に——

久保 蘭 愛

1. はじめに

動詞の音便については中央語における発生や変遷、その機能について数多くの論考が存する。また、東西方言の指標となるハ行四段動詞の音便形など、地域差にも注目されてきた。なかでも中央語史におけるバ行マ行の音便形は、撥音便からウ音便へ、そして再度撥音便へという興味深い変遷をたどったといわれる。その変化の過程において、中世期を中心に、同じ行の動詞でありながら撥音便とウ音便の両形が見られるという現象も生じた。現代九州方言においてもバ・マ行の音便は両形見られるが、方言文献の乏しさゆえに過去方言の様相はどういったものであったのか、歴史的にどのように変遷したのか、明らかになっていない。中央語史における問題を考えるうえでも、方言史におけるバ・マ行の音便の様相を記述しておくことは必要であると思われる。

そこで本稿では18世紀の鹿児島方言を反映するロシア資料を対象に、各種音便形をまとめるとともに、主にマ行動詞の音便についての記述および中央語との比較を試みたい。

なお本稿では、主に動詞がテやタに接続する際に語形が変化することを指して音便という語を使用する。

2. ロシア資料とは

異なる言語を通して日本語を記録した資料を「外国資料」と呼ぶ¹⁾。キリシタン資料や朝鮮資料、中国資料などが外国資料としてよく知られるところである。それに加えてロ

1) 外国資料については濱田（1962）を参照。

シア語の側から日本語を眺めた資料がある。それが「ロシア資料」である。ロシア資料には東北との関連が指摘される言語資料も存するが、本稿では18世紀前半にロシアへ漂着した薩摩の少年ゴンザが関わって成立した外国資料を「ロシア資料」と呼び、考察の対象とする。

村山（1965）の記述をまとめると、概略次のような経緯で成立したという。

1728年、17人の乗組員を乗せて薩摩を出航した船が大阪に向かうが、途中暴風雨に遭う。船は約7ヶ月の漂流を経て、1729年にカムチャッカ半島に漂着したが、現地にいたカムチャダル人たちによって、乗組員17人のうち15人が殺害された。残されたのは、11歳の少年ゴンザと年配のソウザだけであった。2人はしばらくコサック50人隊長のシュティンニコフに酷使されていたのだが、後に襲撃のことが役人に知れ、ロシア政府に保護されることとなった。その後、2人はペテルブルクに送られて洗礼を受け、ソウザはコジマ・シュルツ、ゴンザはデミアン・ボモルツェフと名付けられた。そして、科学アカデミーに留め置かれ、ロシア語を学ぶとともに、1736年に設立された日本語学校でロシア人に日本語を教えることとなった。日本語教育はゴンザとソウザが母国語を忘れないためでもあったという。1736年9月にソウザが亡くなるが、一方のゴンザは1739年に21歳の若さで亡くなるまで、2人の世話をしていた科学アカデミーのアンドレイ・ボグダーノフの下、日本語資料の編纂に携わったという（以上村山（1965）による）。

これらの日本語資料はロシア語と日本語の対訳資料であり、ロシア語部分はもちろん、日本語訳部分もすべてキリル文字で書かれたものである。しかし、その日本語は中央語を反映したものではない。漂流民に関するロシア側の報告書等に彼等が薩摩の出身と記述されていること、また、そこに記されていることばは、18世紀前半の中央語とは全く異なる特徴を持っており、いくつかの音声的な特徴が現代鹿児島方言と一致することなどから、18世紀前半の鹿児島方言を反映する方言資料であるとされている。

本稿では、ロシア資料が鹿児島方言史を明らかにするための有用な資料であると捉え、これらの資料のうち、『日本語会話入門』『友好会話手本集』『世界図絵』の3点を用いて²⁾、そこに現れる音便の様相、特に2種の音便形の現れるマ行動詞の音便に対象を絞って眺めてみたい。

2) 『日本語会話入門』『友好会話手本集（草稿本）』は、それぞれ村山（1965）、江口（2009）によって用例を集め、九州大学図書館所蔵本にて確認した。『世界図絵』は、江口（2009）に拠って用例を集めた。日本語訳については、村山（1965）、江口（2009）に拠った。

以下、ロシア資料から例を挙げる際は、ロシア語文、() 内にその現代日本語訳、ゴンザ訳、() 内にゴンザ訳を解釈し漢字仮名交じり文にしたものの、順に挙げる。問題となる箇所には下線を引き、カタカナ表記で具体的な音形を示した。また、出典は、『世界図絵』=【世界】、『友好会話手本集（草稿本）』=【友好】、『日本語会話入門』=【日本語】、のように示し、それぞれ例の存する章、『日本語会話入門』については影印に記載の用例番号を挙げる。

3. マ行動詞の音便

3.1. ロシア資料の音便概観およびマ行動詞の音便

本資料の音便も、現代における各地の方言や中央語と同じく、行によって異なる音便形が現れる。その音便形を、それぞれ動詞の行にしたがって分類すると、次のようになっている。

- (1) a カ行・ガ行・サ行³⁾ = イ音便
- b ハ行⁴⁾・マ行・バ行 = ウ音便
- c タ行・ラ行 = 促音便
- d マ行 (・ナ変)⁵⁾ = 撥音便

3) 現代鹿児島方言では下二段化がすすんでいるが、この資料ではサ行動詞が規則的にイ音便を起こす。

- (1) ロシア語文：Вси конныя роты посѣчены, обсе́чены, побиты.

(全ての騎馬中隊は切られ、切り落とされ、殺された)

ゴンザ訳：сюю кибанандонъ фтокумя киттатъ учкоретать.

(総様 (すべて) 騎馬などの 一組は 切ったと ウチコレタト = 打ち殺したと) 【友好 7 章】

4) ハ行四段動詞は、基本的には現代の西日本諸方言と同様にウ音便となるのだが、1語だけ、ハ行四段活用動詞の促音便形かと思われる例が存する。

- (2) ロシア語文：И убѣгаютъ ни чшмже удержанья.

(そして遠ざかっていき、決して維持できない)

ゴンザ訳：фаччикъ наньджемъ цкамаень юнь

(ファツチク = 這って行く 何にでも 掴まえんように) 【友好 5 章】

この語の元のかたが「這っていく」であるとするならば促音便形の例であり、西日本方言としてはかなり稀な例となるのだが、1語しか見られず分析が難しいため、現段階では考察を措く。

各行ごとに音便の種類は決まっているが、マ行動詞だけがウ音便と撥音便にまたがっていることがわかる。

- (2) ロシア語：В мѣстѣ пили (一緒に飲んだ)
 ゴンザ訳：фототы нуда (一つに ヌダ=飲うだ) 【友好 1108】
- (3) ロシア語：порожь (渡し舟)
 ゴンザ訳：кундафнѣ (クンダフネ=組んだ舟) 【世界 86 章】

(2)(3)はそれぞれ「飲む」「組む」というマ行四段動詞がタに接続したかたちである。撥音便とウ音便に分かれる要因を考えるために、それぞれウ音便を生じる語と撥音便を生じる語に分けてみる。

表1 ロシア資料におけるマ行動詞のウ音便と撥音便

ウ音便	語幹末 a	チェノヂ (てのうで<てなうで) ⁶⁾ 、ヨゴダ (よごうで<よがうで)、ナグソデ (慰そうで<慰さうで)
	語幹末 o	ユダ (読うで)、オズヂェ (おぞうで)、クダ (～込うで；フキクダ、オシクダ、キリクダ、ウチクダ)、
	語幹末 u	ヌスヂェ (盗うで)
撥音便	語幹末 u	ウンダ (産んだ)、ウンダ (續んだ)、ウンダ (熟んだ)、クンダ (組んだ)、スンダ (済んだ)

表中の例を見ると、語幹末が a、o の場合はウ音便になり、u の場合は「ヌスム」を除いて撥音便となっている。語幹末が i、e の動詞の音便形は見られないのだが、語幹末 i の動詞の音便形が存在した可能性を示す語が1語存する。江口 (2009) は、終止形「縮む」に相当する語が「чиджумъ (チヂュム)」となっていることから、連用形のウ音便形に合わせて語幹も変化したのではないかという。

5) ナ変動詞は、終止・連体形においてナ変型を保っているが、連用形では音便を生じている。

- (3) a ロシア語：умираю (死ぬ)
 ゴンザ訳：шинуръ (シヌル=死ぬる) 【世界 18 章】
- b ロシア語文：умрети (死にそうだ)
 ゴンザ訳：шиндже (シンヂェ=死んで) 【友好 9 章】

彦坂 (2001) の述べるように、ナ変型から五段化への移行途中と見られる。

6) 「てなむ」は「連れ立つ」の意。

- (4) 「チヂム」単独で変化した形と考えるよりも、ウ音便化した「チヂウデ→チヂューデ」に語幹を揃えて出来たと考えたほうが良いか。(江口 (2009: 94 脚注))

そうであるとすれば、3点の資料内に「チヂューデ」という連用形に相当する例はないものの、語幹末母音がiの場合もウ音便を生じていたことになる。

中世期中央語を対象にバ行マ行四段活用動詞の音便を論じた大塚 (1955) は、このような現象について、次の原則を指摘している。

- (5) [A] 語幹末がウ列音なるときー撥音便
[B] 語幹末がアエイオ列音なるときーウ音便
の二法則が存在していた。しかしその間に
[a] 語幹一音節語ー特に母音音節である場合ーはそれぞれの原則よりはずれ撥音便となることもある
[b] 前項により語幹末ウ列音でウ音便となるものはほとんど語幹二音節以上の語である
の二傾向も存し、それは抄物よりキリシタン物において著しかった。
(大塚 (1955))

つまり、語幹末母音によって、音便の種類が異なるという法則が存在し、それに動詞の音節数も関わってくるということである。

表中の語幹末uの「ヌスム」はウ音便になっているが、二音節動詞であり、大塚 (1955) の原則 [b] から外れるものではない。中央語における(5)の原則はロシア資料のウ音便 / 撥音便の分布にも合致しているようである。

3.2. 現代方言のマ行バ行の音便

こうした語幹末母音の違いによる音便の異なりは、現代九州方言においても見られる。例として、現代佐賀方言について述べた小野 (1983) を見てみよう。

- (6) (6)〜ウーダ類 (〜オム・ウム・イム・ウブ・オブ語尾) コゾーダ (小積んだ)・アスーダ (遊んだ) など
(7)〜オーダ類 (〜アブ・オブ・アム・オム語尾) オローダ (叫んだ)・トーダ (飛んだ) など

(8)～ンダ類 (～ウム・イス語尾) ツンダ (積んだ)・シンダ (死んだ) などウム語尾のもので語幹が二拍以上であれば(6)類に入り、語幹一拍のものは(8)類 (小野 (1983))

ここに見られる「ウム語尾」とは語幹末が u になるマ行動詞であり、「～アプ・オブ・アム・オム語尾」とは語幹末母音が a、o になるバ・マ行の動詞である。語幹末 a、o の動詞が「オーダ」=ウ音便、語幹末 u の動詞が「ンダ」=撥音便になり、「ウム語尾」が二音節以上であれば「ウーダ類」=ウ音便になるということは、大塚 (1955) の指摘に一致する。

一方、現代鹿児島方言については、いまのところ(7)に挙げた木部 (1997) 以外にバ行マ行の音便について述べたものを見つけれられていない。しかし、(7a)に挙げられたウ音便の例を見るといづれも語幹末母音が o であることから、語幹末が u の場合は撥音便になるのではないかと予測される。

(7) a 周辺部では「ヌダ (飲んだ)」「カグダ (囲んだ)」「アスダ (遊んだ)」「ハクダ (運んだ)」のようにマ行・バ行五段活用動詞がウ音便になるが、最近では撥音便に変わってきている。(木部 (1997; I 総論))

b バ行・マ行五段活用動詞は語によってウ音便を起こす。

(木部 (1997; 穎娃町の方言))

そこで簡略ながら、現代鹿児島方言におけるバ行マ行の音便について調査を行った。インフォーマントは昭和 24 年生まれ男性、居住歴は、0-18: 鹿児島県日置郡 (現: 南さつま市)、19-26: 北九州市、27-: 鹿児島県南さつま市。調査結果は次の表のとおりである。なお、ロシア資料ではマ行動詞のみに撥音便とウ音便の両形が見られ、バ行動詞は語幹末 u の動詞が見られないためか、ウ音便の例しか存在しない。しかしながら、中央語や現代方言においてはバ・マ両行の動詞が音便において同じふるまいをすることから、ここではバ行動詞も加えて調査を行った。

表 2 を見ると、ウ音便になるのは語幹末母音が a、o の場合と、二音節以上の語幹末 u の動詞であり、一方の撥音便は語幹末母音が u である動詞に偏っている。つまり、およそ大塚 (1955) の指摘する語幹末母音による違いがあることがわかる。中には二音節以上の語幹末 a、o の動詞でありながら撥音便を生じる「キザンダ」や「ハコンダ」のような例も見られるが、木部 (1997) の指摘に見られるように、本来的にはウ音便であっ

表2 現代鹿児島方言のバ行マ行の音便

音便の種類	語幹末の母音	語例
ウ音便	a	カゴジョケ（屈うでおけ）、ナロジョケ（並うでおけ）、テノデキタ（てなうできた）
	u	シズダ（沈うだ）、ムスジョケ（結うでおけ）
	o	アスジ（遊ぶで）、トジ（飛うで）、ヨダ・ユダ（呼うだ）、ヒックダ（引き込うだ）、ハコダ（運うだ。ただし、ハコンダも可）、ユルクダ（喜うだ）
撥音便	a	アンダ（編んだ）、キザンダ（刻んだ）
	u	ウンダ（産んだ）、ウンダ（熟んだ）、クンダ（組んだ）、スンダ（済んだ） スンダ（住んだ）、ススンダ（進んだ）、フンダ（踏んだ ⁷⁾ ）、ツンダ（積んだ）、カスンジョッゴタ（震んでいるようだ。ただし、カスジョッも可）、チズンダ（縮んだ ⁸⁾ ）

たものが徐々に撥音便に変わりつつある状態を示しているものと思われる。

4. 中央語との比較

中央語におけるバ行マ行の音便についてはすでに挙げた大塚（1955）をはじめ、先学の論が存する。ここでは先行研究による中央語のウ音便と撥音便の分布と、ロシア資料の様相とを比較してみたい。

天草版平家物語と原拠本の音便の対応を記述した江口（1990）は、天草版のバ行マ行のウ音便について「（語幹末）ウ列音は撥音便をしていて、ウ音便にウ列音がない」と述べる。しかし、「ただし、B（筆者注：大塚（1955）の挙げる規則〔B〕。(5)参照）の「語幹末がアイエオなる時はウ音便」ということについては、必ずしもそうっていない」とし、例外的に語幹末oの動詞で撥音便になっている語として「およぶ」「ふしまろぶ」「よろこぶ」を挙げている。

濱田（1954）は、キリシタン資料の分析から「假名資料では、單に傾向性の程度にしは見られなかつた撥音便とウ音便との分化の原理が、極めて分明に、一は語幹uに終るもの、一はその他の母音に終るものと言ふ區別に存する」と語幹末母音による原則を認

7)「踏む」は「(靴を)履く」の意。

8)「チズンダ（縮んだ）」は、本来語幹末iの動詞であつたと思われるのだが、終止形が「チジウム」になった結果、語幹末もuになり撥音便化・拗音の直音化が生じたものと思われる。

めつつも「但し実際の例については双方ともかなりの例外が見出されると云ふことが明らかに became と思ふ」として、撥音便となる「臨む」「謹む」「飛ぶ」などいくつかの例外を挙げている。

また辰野（1978）は、玉塵抄に見られるバ・マ行の音便について、語幹末母音が a > o > i > e の順にウ音便化しやすく、語幹末 u の場合は撥音便になりやすいと述べるものの、大塚氏の原則に外れる例が多く存することを指摘している。

さらに、狂言については虎明本狂言集⁹⁾を調べてみたところ、語幹末母音 u の動詞は二音節動詞「結ぶ」1 例を除いていずれも撥音便であるものの、語幹末母音 a、o の動詞は「押し柔む」「挟む」など二音節以上であっても撥音便になるものがある¹⁰⁾。つまり、中世期の中央語を反映する資料は、資料間にいくらか差が見られるものの大塚（1955）の説におおよそ従うものであるが、語幹末の母音によって必ず音便形が決定するというわけではなく、ウ音便になりやすいか撥音便になりやすいかという程度の問題であり、いずれも例外が生じているということである¹¹⁾。

一方、ロシア資料3点に関しては、先の表1にあるように語例は少ないものの二音節動詞ヌスムを除いて、マ行動詞は大塚（1955）の語幹末母音による原則〔A〕〔B〕を守る傾向があるように思われる。バ行動詞は語幹末 u の動詞が見られないためか、撥音便とウ音便にまたがっていない。しかし、現代方言同様バ行動詞もマ行動詞とふるまいを同じくすると考えるならば、ウ音便形「トゥヂ（飛うで）」「アスヂ（遊ぶで）」「ユダ（呼うだ）」なども加えられる。語幹一音節動詞である「飛ぶ」は、江口（1990）のキリシタン資料の調査や虎明本狂言では撥音便となっている。しかし、この語もロシア資料ではウ音便として現れる。また「読む」「呼ぶ」なども語幹1音節の動詞であるが、例外なくウ音便であり、こちらも語幹末母音による棲み分けを守ろうとしているものと考えられる。こういった例も併せて考えると、ロシア資料のバ・マ行の音便の分布は中央語に比して大塚（1955）の原則、特に語幹末母音の規則がより強く働いていた可能性がある。

大塚（1955）は、現代九州方言のバ行マ行の音便について、「九州方言の現状は（中略）

-
- 9) 池田廣司・北原保雄（1972）『大蔵虎明本狂言集の研究 上中下』表現社 をテキストとして利用した。
- 10) 語幹末 e の動詞は、謡の箇所「おめきさけうで」の例が見られた。しかしこれは謡に含まれる例であることから当時の口語を反映したものとは考えにくい。そのため例外として扱った。語幹末 e の動詞はこの語以外に見られなかった。また、ト書きの例は除外した。
- 11) もっとも、先行研究が述べるように、仮名資料の場合は「ウ」と書かれていたとしても、実際に u であったのかは慎重に考えねばならない。

キリシタン物の動揺の行きついた一の姿であろうと思われる」と述べる。この「現状」とは、前田（1954）の指摘する、小野（1983）のような九州方言（おそらく具体的には壱岐・豊前・筑後などを指しているものと思われる）の、「語幹末がア・オ・エ・イ列音節なる場合（中略）ウ音便」、「語幹末がウ列音節なるものは、準文語・口語ともに撥音便」であり、その中で「二音節以上のはすべてウ音便である」という様相である。前田氏の述べるとおり、現代鹿児島方言でも徐々に崩れつつあるものの語幹末母音による原則に従いつつ、音節数によっては語幹末 u であってもウ音便になりうるという様相を示す。この様相は、鹿児島方言においては近現代に至って生じたものではなく、早く 18 世紀にはすでに生じていたものと言えよう。

5. 分布の要因

さて、このバ行マ行のウ音便と撥音便のあらわれは何に起因するものであろうか。柳田（1984）は、これについて、「①バ・マ行四段活用動詞は、音韻変化によって、撥音便を起し、それから更にウ音便に進行して行ったが、②そのうち語幹末母音が u である場合には、同一母音の連続をきらってウ音便化が遅れていた」と述べている。つまり語幹末 u の撥音便は、同音の母音連続を避けようとしたために生じていたということである。

そこで、鹿児島方言における母音連続について考えてみたい。現代鹿児島方言は母音の融合が盛んであり、これは一種の母音連続の回避であると思われる。母音融合は音便を生じる語幹末においても生じうるものであり、それはロシア資料においても同様である。

(8) a /ai/ ⇒ /e/ の例

ロシア語：нихтями чешемъ й царанаемъ.

（爪では搔いたりひっかいたりする）

ゴンザ訳：цмѣджа кетай какажиттай суръ.

（爪では ケタイ=搔いたり かかじったり する）【日本語 167】

b /oi/ ⇒ /e/ の例

Якори ввргохомъ предпристанью

（碇を埠頭の前に投げ入れる）

(碇など オテタ = 落といた 港の前)【友好 344】

たとえば、(8a)の例はカ行動詞のイ音便「掻いた」の /ai/ が /e/ に変化している。(8b)の例はサ行動詞のイ音便「落といた」の /oi/ が /e/ になっている¹²⁾。

これに加えて、音便形ではないものの、同音の母音を避けるという例もまたいくらか見られる。村山(1965)によると、ロシア資料においては、語中のリ・レの頭子音が弱化しつつあるようである。確かにリ・レの /r/ が弱化し、それぞれイ・イエになる例がかなり見られるのだが(= (9))、試みに、『友好会話手本集』のリ・レを含む語を概観してみると、直前の母音が同音の場合は弱化しにくいという傾向があることがわかった(= (10))¹³⁾。

- (9) ロシア語文：Вілг：вещь в'малѣ соберу, и в'кратцѣ изреку.
(ヴィルヘルム：ものごとを少しに纏めよう、そして短く言おう)
ゴンザ訳：Вілг：моно читто тоїяцмю мишко иво.
(ヴィルヘルム：もの ちっと トイヤツミュ = 取り集めう 短う 言おう)
【友好 5 章】
- (10) ロシア語文：Гуг：посѣдствуй прошутя, и чтобѣ препятіе не учинить, молчати буду.
(ユグノー：結果はあなたに(教えて)もらおう、邪魔はしないように黙ってしよう)
ゴンザ訳：Гуг：шїрьяй моравъ конатаво, икенлжай варкакот шелжена дамачче оро.
(ユグノー：シリヤイ = 知りやれ もらう こなたを、如何にであれ 悪かことせでな¹⁴⁾ 黙って おろう)【友好 3 章】

上の(10)にあるように、子音の弱化によって同音の母音が連続する場合は、「シイヤイ」

12) ただし、すべての母音連続が融合するわけではなく、ui などは融合しにくい。たとえば「好いた」など。一つの方言において、母音融合がどこまで許容されるかという問題は興味深い。しかし現時点で答える余裕がないため、今後の課題にしたい。

13) ただし、レの頭子音が弱化して ee となった母音連続の例は見られなかった。

14) 「шелжена(せでな)」は否定の中止形「しないで」の意。

とはならないことが見てとれる。

ただし、同音の母音連続が生じるケースもある。たとえばカ行動詞の場合、語幹末 i の動詞でもイ音便を生じる。語例としては「聞いて」「引いて」「敷いて」くらいであり、異なり語数としては少ないがいくらか存在する¹⁵⁾ (= (11))。ハ行四段動詞も語幹末が u であってもウ音便化を生じる動詞「食う」がある (= (12))。また、形容詞もウ音便を生じるが、見たところ語幹末が u の場合も音便を生じているようである (= (13))¹⁶⁾。

- (11) Фео : не довольно услышалъ, яко па в лъ товапишнашъ немоществуеть.
(フョードル : 我々の友人のパーヴェルが病気だとちょっと聞いた。)
Фео : читто кита икенъ па в ла ндага дошь невораръ
(フョードル : ちっと キタ = 聞いた 如何に パーヴェルは 我々の 同志
寝おらる)【友好 11 章】
- (12) ロシア語文 : кормится на насѣсти (卵を抱いて餌を食べる)
ゴンザ訳 : кучеораръ тамагодечъ
(クチェオラル = 食うておらる 卵抱いて)【世界 19 章】
- (13) рейн сіе многи презнѣди
(レイノルド : これは多くが軽んじている。)
рейн : коиво таксе варумирайта
(レイノルド : これを たくさん ワルミライタ = 悪う見られた)

【友好 3 章】

(10)のような、同音の母音連続を避けているように見える例も存するが、動詞や形容詞の音便という、本稿で扱うバ・マ行動詞と同じ環境にある(11)(12)(13)の例を考え合わせると、なぜバ行マ行の場合のみが語幹末が同音の u になるためにウ音便を避けるのかという点について説明ができない¹⁷⁾。

15) 本資料では、「キ」や「ヒ」は単独母音であれば無声化が生じ、кче (着て) や кѣче (来て) のように母音が表記されないか軟音記号ъによって表すかのどちらかであるが、「聞いて」「引いて」はкиче (聞いて)、фиче (引いて) と母音が表記される。江口 (2009) によれば、これは長音相当であるという。現代鹿児島方言は長音短呼が盛んであり、この資料のкиче (聞いて) もどれほどの長さをもって発音されたのかは不明であるが、短母音とは異なる長さであったのだろうと思われる。

16) 形容詞のウ音便については北原 (1967) を参照。

この点に関して、迫野（1987）は、中世中央語におけるバ行マ行のウ音便 u を単なる母音と見るのではなく、n に対立する撥音であるとみている。奥村（1955）の指摘する中世期の漢字音の鼻音韻尾が先行母音の狭広によって「ウ / ン」の 2 種に書き分けられていることや、亀井（1950）の指摘する擬声語・擬態語の鼻音かと疑われるものが「ウ」で表記されること（たとえば狐の鳴き声「コウコウ」など）を引きつつ、バ行マ行の音便の様相を踏まえて、「u などの狭母音の後には舌音の [n] が現れやすく、a のような広母音の後では、明瞭な舌の動きを伴わない [Ū] のような鼻音が現れやすいというのは音声的にも自然である¹⁸⁾」とし、「ウは、ンと同じく撥音であり」、「音韻的にも互いに対立する別個の音項としてそれぞれあったとみてよいのではないか」と述べる。

この論は中央語を対象としたものであり、鹿児島方言がこれにあてはまるかは不明である。しかし、中央語のバ・マ行のウ音便は鼻音を持っていた可能性がいくつかの先行論ですでに指摘されており、また鹿児島方言も後続のテヤタが濁音化することから、u の鼻音の有無について考えてみる必要はあろう。

ロシア資料のウ音便表記を振り返ってみると、鼻音性のないロシア資料の u（キリル文字では y）との間に表記上の区別はない。

(14) 鼻音のない u 表記

a теряю（紛失する）

уцсурь（うっする）¹⁹⁾ 【世界 41 章】

b Гонити коня шпорами.（馬を鞭で追う）

ммаво уче цуппайдже²⁰⁾（馬を ウチェ = 追うて 突っ張りで）

17) おそらく、(10)の母音連続が避けられ、(11)～(13)で許容されるのは、当該現象が生じた時代によるものと思われる。(11)～(13)の音便は、18 世紀以前の早い段階で生じたため、仮にこれらの例が、音便発生当初許容されなかったとしても、徐々に許容されるようになったものであろう。一方、(10)の例は、18 世紀からそれほど遡らない時期に生じたものであるため、ロシア資料の段階では許容されないものと思われる。しかし、そうであるならば語幹末母音 u を持つバ・マ行のウ音便も許容されるようになってよいはずである。

18) 濱田（1954）は、バ・マ行の音便の分布に関して、「即ち母音の性質から云へば、a・o の如き口の開きの比較的大きいものが先行する場合にはウ、比較的狭い e・i・u の如きものが先行する場合にはン」となるのが自然であるとする。

19) 「うっする」は「失くす」の意。

20) 「突っ張りで」の箇所は取り消し線にて消してある。

しかし、これがただちに u の鼻音の否定にはつなげるわけではない。仮にゴンザのマ行動詞ウ音便が鼻母音 [Ū] であり、ロシア人が聞き取れたとしても、ロシア語側に鼻母音を表記するための手段はなかったと思われるからである。古代ロシア語の鼻母音は10世紀までには消失しており²¹⁾、18世紀の時点ではそれを表すことができなかったものと思われる。また、ロシア語に鼻母音がなかったためにロシア人にとって鼻母音が聞き取れず、母音 u として聞きなしたということも考えられよう。このように、ウ音便の表記に用いられる文字 y が実際は鼻母音あるいは撥音相当であったとしても、ロシア語にない音韻であったということ、それによって書き表す手段がロシア語側になかったことからウ音便のように見えるという可能性は否定できない。

一方で現代と同じく単純な母音であったという可能性も存する。現代鹿児島方言のバ・マ行の音便形は、後続のテやタの濁音化を見ても、本来的には鼻音を持っていたと思われる。しかし、先のインフォーマントの男性の発話のウ音便には鼻音性は特に感じられない。すでに母音 u になっているものと思われる。

また、音節数によって音便が変化するというのも少々気になるところである。語幹末母音の狭広によってウ音便になるか撥音便になるかが決まるのだとしたら、音節数はそう大きく関与しないのではないかとと思われるためである。音節数が重要なファクターとして働いているとするならば、やはり語幹保持、あるいは語の同定のために音便が2種に分かれたものであり、その際に現れるウ音便は単なる母音ということになろう。

現時点ではロシア資料のウ音便は母音の u であったかとも思われるのだが、現代方言に見られるような母音 u であったのか、中央語で指摘されているような鼻母音あるいは撥音相当であったのか明確な答えを出すことは難しく、一旦考察を措く。

6. おわりに

本稿では、ロシア資料の音便の様相を概観するとともに、マ行動詞のウ音便・撥音便のあらわれについて記述を行った。その結果、中央語より比較的語幹末母音による音便の使い分けを守ろうとしている可能性を指摘した。また、現代方言におけるバ・マ行の音便の別は、早く18世紀には存在したことも述べた。

21) 佐々木 (1985) を参照。

しかし、18 世紀前半の鹿児島方言においてなぜこのような棲み分けが生じているのかについてははっきりとした答えを出すことができなかった。この点については今後の課題としたい。

【使用テキスト】

池田廣司・北原保雄（1972）『大蔵虎明本狂言集の研究 上中下』表現社

【参考文献】

江口正弘（1990）「天草版平家物語の動詞の音便形について」『熊本女子大学学術紀要』

42

大塚光信（1955）「バ四・マ四の音便形」『国語国文』24-3

奥村三雄（1955）「撥音シの性格―表記と音価の問題―」『国語学』23

小野志真男（1983）「佐賀県の方言」『講座方言学9 九州地方の方言』国書刊行会

上村孝二（1976）「九州方言の文法雑考」『鹿児島短期大学研究紀要』18

北原保雄（1967）「形容詞のウ音便―その分布から成立の過程をさぐる―」『国語国文』

36-8

木部暢子（1997）『鹿児島県のことば』平山輝男編 明治書院

迫野虔徳（1987）「中世的撥音」『国語国文』56-7

佐々木秀夫（1985）『ロシア古文典《音韻考》』ナウカ

辰野弘由紀（1978）「『玉塵抄』におけるバ・マ四段の音便形について」『二松学舎大学人

文論叢』14

濱田敦（1954）「音便―撥音便とウ音便との交錯―」『国語国文』23-3

濱田敦（1962）「外国資料」『国語国文』32-11

彦坂佳宜（2001）「九州における活用型統合の模様とその経緯―『方言文法全国地図』九

州地域の解釈―」『日本語科学』9

前田勇（1954）「近古末に於けるバ四・マ四の音便事情管見」『国語国文』23-9

柳田征司（1984）「活用語の語幹末に生じた母音連続（上）（中）（下）」『国語国文』53-

2、3、4